

令和元年9月11日現在

機関番号：32413

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02733

研究課題名(和文) 文献による日本語アクセント史研究の総括と展開

研究課題名(英文) New Light on the History of Japanese Language Accent --based on the researches of written materials from past to present--

研究代表者

鈴木 豊 (Yutaka, Suzuki)

文京学院大学・外国語学部・教授

研究者番号：70216456

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本共同研究の目的は(1)100年におよぶ近代的なアクセント史の先行研究の成果を総括的に検討しなおし、(2)(一次史料を精査することにより資料としての性格を確定するという基礎的研究を経た)文献アクセント史研究によって鎌倉時代以前の古代アクセントを記述し、(3)アクセント史に言及する、文献アクセント史研究によらない研究に対して文献アクセント史研究の立場から批判的検討を行い、(4)文献アクセント史研究の成果を隣接他分野の研究に応用・貢献することである。本共同研究により、アクセント史研究の現在の到達点を明らかにするとともに、重要な新発見・新知見を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究の学術的背景はアクセント史の研究の総括、そしてその発展的継承の必要性である。研究期間内に、文献による古代アクセント研究の蓄積を、それぞれの研究対象とした資料別に整理(網羅的かつ詳細な文献目録も作成する)して批判的に検討し、現代の到達点を明らかにすることを目的とする。研究史を総括して、現代における到達点を明示することにより、今後のアクセント研究の一つの立脚点となり、研究そのものの質的向上に資することになるだろう。また、あらたに文献アクセント史研究に志す人に対する導入として、今後のアクセント研究にいくつかの方向を提案し、さらなる発展的研究・応用的研究に示唆を与えることをも心がける。

研究成果の概要(英文)：What our research team wishes to show in this paper are 1) to thoroughly reexamine the accumulated knowledge of earlier researches on the history of Japanese accent conducted in the past hundred years, 2) to describe old Japanese accent of pre-Muromachi period based on philological research method: starting with close examination and evaluation of primary historical written materials, 3) to examine critically the researches referring to the history of Japanese accent that are not on primary materials basis from the standpoint of philological research of the history of Japanese accent, and 4) how the research results of philological research of the history of Japanese accent apply and contribute to various kinds of linguistic studies related. Our research team hereby achieved to clarify more explicitly than before the findings of earlier researches on the history of Japanese accent as well as to add some important new findings and ideas.

研究分野：日本語学

キーワード：アクセント史 声点 節博士 『日本書紀』 『類聚名義抄』 『四座講式』 差声方式 アクセント体系

1. 研究開始当初の背景

研究の背景として(1)100年におよぶ近代的アクセント史の研究の蓄積とその総括、そしてその発展的継承の必要性、(2)文献アクセント史研究による古代アクセントの記述の必要性。(3)アクセント史に言及する研究に対する文献アクセント史研究からの批判的検討の必要性、(4)文献アクセント史研究の応用(解釈学的研究、文献学的研究、芸能史的研究、日本語学研究〈音韻史・音調史的研究〉への貢献)の必要性の4点がある。

アクセント資料(アクセントを反映するあるいはアクセントが注記された文献資料)を用いた研究では、その文献の成立年代や写本相互の関係などの文献学的研究や、アクセント注記者の特定・アクセント注記の目的などの考察が不可欠となる。これらの基礎的な研究の後にはじめてアクセント史資料としての性格を確定し、日本語学の資料として扱うことが可能となる。(1)(3)については文献目録の作成と研究史の整理、(2)については文献アクセント史研究を行う上での注意(アクセント記号や術語の解説を含む)と各資料の文献学的な解説などを作成する。以上(1)から(3)によってアクセント史研究の到達点を明らかにし、(4)の文献アクセント史の応用研究を促すことが本研究の学術的背景である。

2. 研究の目的

この研究の学術的背景はアクセント史の研究の蓄積とその総括、そしてその発展的継承の必要性である。研究期間内に、文献による古代アクセント研究の蓄積を、それぞれの研究対象とした資料別に整理(網羅的かつ詳細な文献目録も作成する)して批判的に検討し、現代の到達点を明らかにすることを目的とする。研究史を総括して、現代における到達点を明示することにより、今後のアクセント研究の一つの立脚点となり、研究そのものの質的向上に資することになるだろう。また、あらたに文献アクセント史研究に志す人に対する導入として、今後のアクセント研究にいくつかの方向を提案し、さらなる発展的研究・応用的研究に示唆を与えることをも心がける。

3. 研究の方法

本研究の目的は、文献による古代アクセント研究の蓄積を、それぞれの研究対象とした資料別に整理して批判的に検討し、現代の到達点を明らかにすること、そこからさらにその応用的研究を促し、寄与することにある。このことを達成するための研究計画・方法の概略は、①研究資料である文献についての研究、②古代アクセント研究における重要テーマについての研究、③文献アクセント史研究から構築される古代アクセントの記述的研究、さらにその発展的・応用的研究である。

研究の基本的方針は、①研究資料について原典主義の保持と文献学的検討による資料の把握、②研究業績の網羅的整理と批判的再検討(研究文献目録の作成も)、③アクセント史研究における現代的到達点の明示(諸学説の並記と独自見解の提示)、④発展的研究と応用的研究における方向性の提案である。

4. 研究成果

各研究者の役割分担を研究資料・研究テーマ・時代にかけて示せば以下のようなになる。

	資料研究の分担	テーマ研究の分担	記述研究の分担
鈴木 豊	古事記・日本書紀などの歴史資料	声点と調値	奈良・平安
佐藤栄作	類聚名義抄などの古辞書資料	差声と文字	奈良・平安
加藤大鶴	漢籍・仏典などの漢文・和化漢文資料	中国語の声調と日本漢字音	平安・鎌倉
坂本清恵	古今集、源氏物語などの和文系資料	定家仮名遣いと古典研究	平安・鎌倉
上野和昭	四座講式などの仏教関係資料	節博士と音調との関係	鎌倉

われわれは研究史を整理し、新たな事実の発見や解釈の見直しをすることにより、多くの通説の訂正を行う研究成果を得た。以下に研究成果を資料別に簡潔に記す。

(1) 古事記・日本書紀などの歴史資料

鈴木豊(2018)は森博達(1991)(1993)(2003)の規定した α 群に二つの区分を認め(α 群Ⅰ類・ α 群Ⅱ類)、担当者は万葉仮名表記の原資料をもとに書記を編纂したと推定した。

鈴木豊(2017)は承和講書時の声点付万葉仮名を有する乾元本『日本書紀』に関する考察である。新天理図書館善本叢書が刊行されたのを機に「弘仁」等の注記をもつ万葉仮名訓がどのような経緯で注記されたのかについての推定を行った。

(2) 類聚名義抄などの古辞書資料

佐藤栄作(2018)(2019)は観智院本『類聚名義抄』の二人の書写者の声点施点の違いに関する考察である。声点注記位置の比較によって多くの有益な情報を読み取ることができる。佐藤栄作(2019)「はじめに」から一連の研究の成果と方法について述べた部分を以下に引用して示す。

前稿において、カタカナを用いて六声体系の声点を区別することは極めて困難であり、四声体系であつても区別しづらいことを述べた。また、「観智院本類聚名義抄の二人の書写者の声点の違い」として、仏上から一帖おきに担当した書写者 B の声点(上声点と平声点)は、右の例(仏上 39 オ 2)のように、ほぼ一列に並ぶことが多い。一方、仏中から一帖おきに担当した書写者 A の方は、声点がジグザグに折れ曲がって並ぶことが多い。と指摘し、続けて、書写者 B はカタカナからやや離して声点を差す傾向があるのに対して、書写者 A はカタカナの点画に極めて近くに差す傾向があることよるとした。本稿では、この一帖ごとに施点状況が異なること一すなわち二人の書写者=施点者の施点傾向が異なることについて、同一語(和訓)への施点が一帖ごとに異なることを例を挙げて確認するものである。

鈴木豊(2018)は『金光明最勝王経音義』所載のいろはうたのアクセントの考察を踏まえて、いろは歌の作者が源為憲であるとの推定を行った。またいろは歌の成立時には 48 字からなるとの説に対して反論し、成立時から 47 字であったと推定した。以下に要旨を引用して示す。

小論は、[e]と[je]の音節の合流過程を明らかにし、源為憲がたみへの歌の作者であることを明らかにした、小倉肇(2001)(2003)(2004)を承けるものである。小倉肇(2004)は亀井孝(1977)

のいろは 48 字説を受け入れているが、以下の理由から、いろは歌の作者は源為憲であり、成立当初から 47 文字であったと考えられる。源為憲は次の構想(制約でもある)のもとにいろは歌を製作した。(1) 貴顕の子弟(具体的には藤原頼通)のための教育に資する。(2) 47 字の「同じ文字無き歌」の誦文(和歌)を作製する。(3) ア行「エ」・ヤ行「エ」の一方を隠す。(4) 和歌の形式を七五調 4 句の今様形式とする。(5) 『涅槃経』雪山偈(諸行無常偈、無常偈とも)の四句「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂」を句題とする。(6) 七言詩を模して 7 字区切りにしたとき、句末に「とかなくてしす」を折句として隠す。(7) 『古今集』の小野小町(巻 2 春歌下 113 番)・作者未詳(巻 18 雑歌下 954 番)・物部良名(巻 18 雑歌下 955 番)の歌を踏まえる。

(3) 漢籍・仏典などの漢文・和化漢文資料

加藤大鶴(2018)『漢語アクセント形成史論』(笠間書院 472 ページ)は博士論文を書籍化したものである。はしがきから刊行の目的を記した部分を引用して示す。

(1) 本書では借用語である漢字声調が日本に受容され漢語アクセントを形成していくまでを音韻史の流れのなかにモデルとして捉える。従来、漢語アクセントの伝統性を問おうとすれば、それが近現代のアクセントであれ、漢字声調に立ち返る方法のみがとられていた。しかし、本書が主として扱う鎌倉初期の漢語音調を茂市レバ音韻史の空白を埋めることができ、受容と変化の指摘プロセスを総合的に理解することができるようになる。

(2) 日本語の影響を相対的に高く受けたと考えられる和歌漢文資料、和漢混淆文資料を分析に用いることで、漢字声調が日本語に受容し変化するプロセスをより詳細に観察できるようになる。またその変化を日本語アクセントの問題として捉えることが可能になり、古い文献資料に基づくアクセント研究に漢語の面から新たな光を当てることができる。

加藤大鶴(2019)は現代諸方言の漢語アクセントが上記で見たような伝統性をどれほど反映しているかについて、(1) 東京・京都・鹿児島における漢語アクセントの対応関係、(2) 異なる音節構造ごとのアクセント型の偏り、(3) 文献資料との対応関係(中国語の原音声調含む)の3つの観点に拠る考察である。

(4) 古今集、源氏物語などの和文系資料

坂本清恵(2018)は「貫之自筆本がどのように書写されているのかを、定家の仮名遣い、とくにアクセントに関わる「お」と「を」の表記に着目し探つ」た論攷である。著者は定家仮名遣いとアクセントの関係について以下の事実を明らかにした(以下引用)。^① 行阿の『仮名文字遣』は大野晋以来、アクセント体系変化を反映したものであり、低い拍が続く L L > H L、L L L > H H L のアクセント変化が早く、L L H > H L L の変化は遅いと考えられていたが、『仮名文字遣』は行阿が自身のアクセントによって仮名遣いを定めたのではない。また、『仮名文字遣』によって、アクセント体系変化の遅速も証明ができない。

^② 定家仮名遣いの批判の書とされていた『仙源抄』は、アクセント体系変化後に長慶天皇が自身のアクセントで書くと定家の残したものとは仮名遣いが異なってしまうことに気づきながらも、本文については、自身のアクセントにより「お」「を」の書き分けを行なったものである。長慶天皇の『仙源抄』は定家仮名遣いの原理を実践したものである。

^③ 定家仮名遣いの原理に基づいて書かれたテキストは極めて稀であり、定家仮名遣いで書かれたものの多くは『仮名文字遣』などの先行文献の仮名遣いを踏襲したものである。

坂本清恵(2019)は「定家仮名遣いと古典研究」についての報告であり、「アクセント史資料として仮名の使い分けを掲げた、金田一春彦『国語アクセントの史的研究原理と方法』(1974年、塙書房)の第二章「アクセント史研究の資料と扱方」で「第七種の文献、文字の使い分け」として取り上げられたアクセントによる仮名遣いについて検証したものである。著者が定家仮名遣いについて明らかにしてきた通説を塗り替える数々の知見がわかりやすく整理されている。

(5) 四座講式などの仏教関係資料

金田一春彦(1964)『四座講式の研究』一邦楽古曲の旋律による国語アクセント史の研究各論(一)』三省堂は文献によるアクセント史研究の「教科書」ともいえる著作である。本書にはアクセントを反映していると考えられる文献を用いてある時代(ここでは鎌倉時代)のアクセント体系を再構築する方法が示されているが、理解が難しい部分もある。著者の大慈院本『四座講式』の墨譜から推定される日本語アクセントの解釈に対する反論もある。

上野和昭(2017)はS.R.Ramsey「日本語のアクセントの歴史的変化」『月刊言語』9;21980.2、E.M.de Boer” The Historical Development of Japanese Tone” (Harrassowitz Verlag 2010:543ff)などの反論にたいして、それらの反論が成り立たないことを丁寧に説明している。

上野和昭(2018)は『四座講式の研究』をその反論をも含めて丹念に検証した上で以下のように記している。

最後に、一つだけ気づいたことを述べる。

それは、著者はこの第四章にたって、『四座講式』から推定される鎌倉時代のアクセントがどこの地のものかについて言及する。その中で、さきには「楽曲〈四座講式〉成立時代の日本語の京都方言のアクセントをうつしているものとすれば」(:320)と仮定して進めた議論が、最後には以下に掲げるように断定的に結論されていることには、とくに注意しておきたい。

『四座講式』に反映しているアクセントは、大体京都語のアクセントと見られる。ほとんど全部は、鎌倉初期の京都方言を写したと見て問題のない調価をもっている。(:483)

上野和昭(2019a)は「これまで難解とされ、また不完全とされてきた文雄のアクセント表示について、その基本的な考え方を推定したもの」である。

上野和昭(2019b)はこれまで正しく理解されてきたとはいいがたい近世の四声認識について、「宣長をめぐって契沖、文雄と比較検討しながら、その述べるところを明らかにした」ものである。これでようやく近世国学者・悉曇学者によるアクセント記述を正しく理解することができるようになったわけであるが、近世において現代とは異なる四声認識が行われていたという新たな知見は単に国語学史の範囲にとどまらず広く今後の日本語研究にとって有益であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 14 件)

上野和昭(2016)「『補忘記』に載る漢語句の音調について」『国文学研究』179 pp54-67

- 鈴木豊(2017)「乾元本『日本書紀』万葉仮名訓の声点」『論集』12 アクセント史資料研究会 pp.1-17
- 上野和昭(2017)「声明資料によるアクセント史研究—金田一春彦『四座講式の研究』について(1)—」『論集』12 pp.65-83
- 鈴木豊(2018)「『日本書紀』α群の万葉仮名—原音声調と日本語アクセントとの対応—」『論集』13 pp.1-21
- 上野和昭(2018)「声明資料によるアクセント史研究—金田一春彦『四座講式の研究』について(2)—」『論集』13 pp.123-152
- 坂本清恵(2018)「『土左日記』はどう写されたか—古典書写と仮名遣い—」『論集』13 pp.41-50
- 坂本清恵(2018)「定家仮名遣いの継承」『定家のもたらしたもの』翰林書房 pp.107-121
- 佐藤栄作(2018)「カタカナの字体から見た声点とその位置—図書寮本『類聚名義抄』、観智院本『類聚名義抄』の書写者と声点—」『論集』13 pp.23-40
- 加藤大鶴(2018)「字音下降拍はどのように実現したと考えるか—金田一春彦『日本四声古義』での音調推定をめぐって—」『論集』13 pp.97-122
- 鈴木豊(2018)「いろは歌の作者について—いろは 48 字説の検討—」沖森卓也編『歴史言語学の射程』三省堂 pp.43-71
- 上野和昭(2019a)「『和字大観鈔』所載のアクセント表記について」『論集』14 pp.15-24
- 佐藤栄作(2019)「観智院本『類聚名義抄』における施点の帖による違い—施点例が多く帖に存在する和訓を例に—」『論集』14 pp.21-38
- 坂本清恵(2019)「アクセント史料としての定家仮名遣い—「第七種の文献、文字の使い分け」の検討—」『論集』14 pp.39-48
- 上野和昭(2019b)「本居宣長の四声認識について」『国文学研究』187 早稲田大学国文学会 pp.80-92
- 〔学会発表〕(計4件)
- 上野和昭(2016)「金田一春彦『四座講式の研究』について」アクセント史資料研究会
- 鈴木豊(2016)「声点資料における濁音表示」アクセント史資料研究会
- 加藤大鶴(2017)「字音下降拍はどのように実現したと考えるか—金田一春彦『日本四声古義』での音調推定をめぐって—」アクセント史資料研究会
- 加藤大鶴(2018)「字音下降拍はどのように実現したと考えるか—金田一春彦『日本四声古義』での音調推定をめぐって—」アクセント史資料研究会
- 〔図書〕(計2件)
- 鈴木豊(2017)『日本書紀声点本の研究』博士論文 早稲田大学文学学術院 346 ページ
- 加藤大鶴(2018)『漢語アクセント形成史論』笠間書院 472 ページ

6. 研究組織

- (1)研究分担者 鈴木豊 (文京学院大学・外国語学部・教授) 研究者番号: 70216456
- (2)研究代表者 上野和昭 (早稲田大学・文学学術院・教授) 研究者番号: 10168643
- (2)研究分担者 坂本清恵 (日本女子大学・文学部・教授) 研究者番号: 50169588
- (2)研究分担者 佐藤栄作 (愛媛大学・教育学部・教授) 研究者番号: 80211275
- (2)研究分担者 加藤大鶴 (跡見女子大学・文学部・准教授) 研究者番号: 20318728